

# 4

人の彼女が  
俺を寝かせん  
くれない



## 道化童子

イラスト ■ 神名あやる

ど-072

他

4人の彼女が俺を寝かせてくれない

道化童子

他

他人文庫



56129564564112



99254119195455

DKDZ596-3-19-45451129-9  
MU2525 500E KLI

他 TANIN WORKS  
タニン・ワークス

TANIN NO DAIHYOU 発行●他人の代表



<http://www.tanin.jp>

4  
人の彼女が  
俺を寝かせた



「着きました。どうぞ」

ワゴンは別に遠くへ行くことはなく、電車と言うと数駅分程度の距離で止まった。

ここまでの道も把握してるし、この辺りもよく知っている場所だ。

ワゴンのドアが開き、促されて降りると、そこは大きなツーバイフォーの、一軒家？ いや、違う、何かの施設か？ とにかくそんな大きな建物が目の前にあった。

えーつと、ここは……看板を見ると「愛妻細胞研究所」と書かれていた。

へー、瑚麻の家って、研究所なんだ。

……え？ じゃあ愛妻氏ってまさか……？

「では中へどうぞ。愛妻氏がお待ちです」

「あの……愛妻氏って、どなたですか？」

今更だが、俺は聞いてみた。

「愛妻氏は、愛妻憲治けんじ氏のことですが？」

知らない人だ！

瑚麻じゃなかった！

いや、だが、愛妻なんて珍しい苗字がそんなにいるとも思えないし……。

「えっと……その方の娘さんに、愛妻瑚麻っていませんか？」

「よくご存知ですね」

「帰りますっ！」

俺は回れ右してワゴンに乗りこもうとして、二人に止められる。

「帰るううう！ 離してええええっ！」

「ここまで来て我儘ワガママを言わないでください。もう

すぐそこですから」

抵抗していると、看板の隅に「自宅に御用の方は裏にお回りください」と書いてあった。

つてことはこの裏に瑚麻もいるつてことか。

「瑚麻あああつ！ 助けむぐつ！」

俺が裏の自宅にいるであろう瑚麻に向かって叫ぼうとしていたら、口を塞がれた。

「むぐうううっ！」

俺の抵抗は二人の男に完全に止められ、二人に引きずられながら、施設内に入った。

俺は付き合って三日目にして、彼女の親父さんに拉致に近い状態で呼び出される羽目になった。

「君がウジム……澤田俊陽君か」

通された応接室のソファに座っていたのは、四十を少し過ぎたくらいのも、聡明そうな男性だった。眼鏡をかけているが、かけていなくても知性的に見える顔だ。

おそらく若いころは結構格好良かったのが分かる。

いや、それよりもさつき俺の事ウジムシって言うおとしなかつたか？

「私には瑚麻という一人娘がいる。知っているかね？」

「は、はい……」

やばい、さつきまで聡明そうだった表情が歪んできたぞ？

「私はね、彼女を目の中に入れて失明しても構わないと思っっているんだ」

「は、はい……」

なんかいきなり猟奇的なことを言い出したぞ？

「貴様にその覚悟はあるのかあああつ！」

「ひいっ！」

いきなり胸倉むなぐらを掴まれて怒鳴られた！

何なのこの親父？

「やるっ 殺るっ！ 貴様を殺ってやる！」

「うわあああつ！ ごめんなさい、ごめんなさい

おとう  
つ親父さんっ！」

物凄い殺意で、本気の殺意でそう怒鳴られると、俺も心の底から恐怖を感じるしかなかった。

「貴様あああつ！ 誰のことを親父と呼んでいる！ 私は貴様の父でもないわあああつ！」

「ごめんなさいごめんなさい！ えっと愛妻さん！」

「馴れ馴れしく呼ぶなああああつ！」

「どうすればいいんですかっ！」

「もつとよそよそしくっ！ そうだな、愛妻氏あいづましとでも呼べ！」

「分かりました、愛妻氏！」

なんか、目の前の人を呼ぶのには少し違うと思っただが、反論してたら体力の命が持たない。

「分かっているだろうな。私は今すぐにでも貴様を殺したい！ だが、貴様が死ぬと娘が悲しむから必死に我慢しているだけだ！」

「ひっ！ 日本の法律も考慮してくださいっ！」

「そんなものは、娘を愛する父の前には無力だ！今の日本にどれだけの若い娘を被害者とした犯罪があると思う？ 法律がそれらから守ってくれているのか？ いや違う！ 男なら自分の大切なものは自分で守らなければならぬだろう！」

「言ってることが真つ当だから反論できない！」

この人は本来、とても常識的な思考を持っている人なんだろう。

ただ、瑚麻を愛しているという感情が強すぎて異常になつてしまつて感じかもしれない。

「とりあえず、貴様の男性機能だけでも殺すっ！」

今日はそれだけで許してやるっ！」

「ぎやああああっ！ 瑚麻あああつ、助けてえええっ！」

俺はそれでリアルな死を覚悟した。

それは本当の死より恐ろしい、俺を生きる廃人にするための、根本的な死だ。

俺が怯え切つて身を縮めていると、溜飲が下がったのか、満足そうにソファに腰かける。

「いや、悪かったね。ついつい感情的になつてしまった。私は愛妻憲治。この愛妻細胞研究所の所長を

している」

「いや、いきなり紳士的になられましても！」

さっきまでの殺気を忘れるわけがないし。

「君に、瑚麻に関することで頼みがある」

「瑚麻の事ですか？ 分かりました」

俺は姿勢を正す。

ヤバい感じのおっさんだし、言うことを聞くのは避けたいが、瑚麻の事なら話は別だ。

「とりあえず、話は後だ……」

愛妻氏は、ゆっくりと立ち上がる。

どこかに行くのか？

「まずは、今貴様が瑚麻を呼び捨てにした罪で。永

遠にしゃが噎れ声にしてやる！」

「ひいひいっ！」

愛妻氏は器具のようなものを俺の口から入れようとする。

それは不透明で真つ赤な薬品で、見た目からどう見ても身体に良さそうとは思えない。

「我々家族以外の者が瑚麻を呼び捨てにするなど神をも恐れぬ大罪だ！ 貴様は今日から瑚麻の名

前を呼べないようにしてやる！」

「ちよ、ちよっと待っててください！ この呼び方は瑚麻が言ってくれて言ったんですよ？」

「なん……だと……？」

今まさに、俺の口に器具を入れようとしていた愛妻氏の動きが止まる。

「ですから、本人の意思を尊重するならば、俺は彼女のことを瑚麻と呼ぶべきだと思います」

「……………」

愛妻氏は、俺を睨んだまま下がりがり、ソファに座り直す。

「それで、頼みというのはだね」

「ええええええっ!? 何事もなかったように続けるんですか!?!」

「まず君に見て欲しいものがある」

俺の抗議をもっともせず、愛妻氏はリモコンを操作する。

すると、壁の上からスクリーンが降りてきて、その対にある映写機が光を放ち、それとともに部屋の明かりが小さくなる。

「私は自宅に、いくつかのカメラを仕掛けてある。これは今の映像だ」

「はあ……」

今、普通にとんでもないことを言ったが、他人の家のことなのでスルーしよう。

画面には、広めのリビングが映っている。

そこにはちよっと油断したルームウェアでソファに座り、リモコンを操作している瑚麻がいた。

で、その隣には、ソファに身体を預け、居眠りしている……瑚麻がいた？

そしてその向こうには、携帯をいじっている瑚麻、更にその向こうにはクツキーを頬張っている瑚麻がいた。

簡単に言うと、長いソファに、瑚麻としか思えない女の子が四人座っていた。

「え？ 何ですか、これ？ CGですか？」

「いや、これは実際の今の私の家の映像だ」

「……壊れてませんか？」

「壊れてはいない。ほら、他のカメラも全て問題ない」

愛妻氏はかちやかちやとカメラを切り替える。その中に、風呂とかトイレとか、あと、女の子の部屋にしか見えない部屋もあった。

「……いや、他人の家のことに口を挟むのもどう

かと思いますが……そこにカメラがあつちや駄目  
でしょ」

「何を!? 私はこうやって瑚麻を陰ながら守って  
いるのだ! 瑚麻に何かあつたらどうする! 私  
以外の誰が責任を取れるのだ!」

「いや……にしても、十六歳の女の子の部屋や風  
呂を、父親が覗くのはどうでしょう? さすがに  
嫌われますよ?」

「貴様! 言つてはならないことを!」

「ひっ!」

襟元を掴まれる俺。

「貴様に分かるか? 一緒に風呂に入れない悲し  
みを!」

「あまりわかりませんが……」

「あれは六年前の二月十五日のことだった……」

瑚麻はいつも通り一緒に風呂に入ろうとする私を  
拒んだのだ……」

「え? 何で日付覚えてるんですか!」

「あの衝撃は一生忘れられんだらうっ! 貴様、  
私をどこまで怒らせるつもりだ!」

「ごめんなさい! でも、子供ってそうやって一  
人立ちするものでしょう?」

「まだ早い! 独り立ちは四十歳になってから  
だ!」

「遅い! せめてその半分で許してやってくれま  
せんか?」

「二十歳だと? 貴様! 四年後に何をするつも  
りだあああああつ!」

「いやあああああつ! 落ち着いてください!

なんか今びっくり映像見たのに、それが霞かすんでま  
すっ!」

なんかよく分からない器具を持って迫ってくる  
愛妻氏を抑えながら、さっきの瑚麻四人がくつろ  
いでいた映像について説明を求めた。

「ふむ。あの映像は本物だ。瑚麻は私たちの一人娘  
で、四つ子でもない」

愛妻氏は何事もなかったかのように説明を始め  
たが、もう慣れたので俺ももう突っ込まない。

「まず、意外に思うかと知れないが、私は多少  
こほんのう子煩惱で、一人娘の瑚麻を心から愛している」

「いやまあ、それは意外でも何でもありませんが」

「それで、私は妻に言わせると心配し過ぎなのだ

そうだ。もし学校に行っている間に事故が遭ったらどうしよう、帰り道で事故に遭ったらどうしよう、そんなことを考えるのは普通だと思うのだが」

「いや、まあ……そうかも知れませんが……」

十六の娘に、多少行き過ぎだとは思ったが、また地雷踏んでも面倒くさいのでそのまま流した。

「だから、私は心の安定のために、バックアップを取ろうと思ったのだ」

「バックアップ、ですか？」

「クローンだ」

「え？」

クローン？

さっきのあれ、クローンだったのか？

いやいやでも、クローンって禁止されてなかったけ？

特に人間は絶対駄目だった気がするんだけど……

……  
「まず、この研究所の説明からしなければならぬ。愛妻細胞研究所は、私が十年前に発見した万能細胞をより詳しく研究するために医療機関を中心とした資本で設立したことになっている」

「はあ」

「だが、本当はクローン技術を研究するために、周囲にそれを咎められることがないように独立したのだ」

「……………え？」

この研究所がクローン研究所でしかも自宅兼、だから瑚麻は実験台ってことか？

「一応万能細胞の研究では一定の成果を得ているだから誰も文句は言わない中、私は瑚麻のためにクローン研究を進めたのだ」

「え？ 瑚麻のクローンを作りために設立したんですか？」

「当然だ。今の瑚麻もそうだが、当時の瑚麻はな、もう天使のようだな？」

なんだか語り始めたが、瑚麻の情報なので俺も興味があつて聞いていた。

「へえ、写真があれば見たいですね」

「そうかそうか、君には特別に見せてやろう」

愛妻氏がリモコンのボタンを押すと、画像が切り替わる。

画面にはタイトル「愛妻瑚麻の軌跡」という、恐らくデザイナーに作ってもらったタイトルロゴが表示される。



下の方に「第二百三十三編集版」とかかかれていた、何回編集してんだよ？

それから穏やかな音楽と共に、瑚麻の赤ちゃんの頃の映像が流れる。

可愛い。

マジ可愛いんだけど、少なくとも一分くらい、映像切り替わりつつも赤ちゃん瑚麻なんだけど。

「だいたい三時間後くらいに六歳の映像になる」

いや、見たいけど！

コピーさせて欲しいけど！

「いや、大変興味深い映像で、ずっと見ていたいの  
は山々ですが——」

「貴様！ 瑚麻をそのような目で見ていたのか！」

「ええええっ!? 今の地雷は分かりません」

「この、子供の瑚麻を興味深く。つまりは性的興奮しながら見ていたのだろう？ 貴様はペドフィリアを通り越している！ 早速通報する！」

なんだか愛妻氏が電話を持ち出したので慌てて止める。

「いえいえ！ 性的興奮なんてしませんし、興味があるのは、瑚麻だからですし！ 興味はあるんですけど、話を進めませんか？」

「そうだね、うん。瑚麻の話だったかな？」

「そうですね」

俺はもう、穏やかに話す愛妻氏にはなにも突っ込まないと決意した。

「私は瑚麻を愛している」

「いや、その辺もう話しました」

決意は一瞬で崩れた。

「ふむ、そう、私はクローン技術を極限まで極めることに成功した。復元率百パーセント、記憶すら復元出来るクローンを作ることに成功したのだ」

「え、百パーセントって凄いじゃないですか」

「だがそれでもなかったのだ。百パーセントの

クローン

複製は確かに凄いかもしくない。寿命も天寿まで生きられるしな。だが、一つの個体が死ぬと、他の個体も死んでしまうのだ」

「え？ どうしてですか？」

もしそうなら、バックアップの意味がない。

「DNAは自分の周囲で自分と同じDNAが死ぬと、自分も死んだと判断してしまう。そのため、百パーセントの複製は意味がないのだ」

クローン

「そうなんですか」

よく分からないが、まあよく分からなくてもいい話だ。

「それで、百パーセントをやめDNAが個体を判別するギリギリのラインを見極め、限りなく百パーセントに近く、後をランダムにした複製を作ることに成功したのだ。それはもう誤差の範囲で、完全なコピーと見ていいだろう」

「はあ、それがさっきのですか？」

いいなあ、一体くれないかなあ……なんて考えないぞ？

「そう、あの三人は少しだけ異なる部分はあるものの、完全な複製と言ってもいい。何しろコピーも自分が本人だと思ってるくらいだからな」

そうか、記憶も複製されるなら、全員自分と自分以外のコピーがいると思うのか。

「だが、作ってみて気づいたのだ。コピーを作るということは、本人の人格を否定することだ。本体

が死んでも悲しまず、コピーを愛し続けるという

のはあまりにも欺瞞ぎまんだと」

「ああ、ようやくそこに至って気が付いたんですね」

「瑚麻にびつくりするくらい怒られてな」

「怒られる前に気付きましょうね」

そのためだけに研究所作って十年かけたんだからな。

可愛い瑚麻のためって気持ちも全く分からないわけじゃないが、さすがにこれはやり過ぎだ。

「それでやはり複製は廃棄しようと思ったのだ」

「はあ、廃棄ですか……」

捨てるんなら一体くらい——。

「貴様！ 一体くらい欲しいと思ったな！」

「ひいっ！ 違います思ってますせん！ 俺も同じ思いですっ！」

「同じ思い……貴様ああああっ！ 瑚麻にそんなことを考えていたのかああああああっ！」

「あんた何考えてんだよっ！」

とりあえず、落ち着かせないと。

「それでっ！俺を何のために呼んだんですかっ？」

迫りくる愛妻氏に聞く。

「ふむ、実は君に頼みがあるのだ。やってくれるなら君と瑚麻の交際を……こ、交際………認められるかああああっ！」

「逆切れっ!？」

「貴様ああああっ！私の大切な瑚麻をおおおおとおっ！」

「落ち着いてくださいって！とりあえず頼みを言ってくださいっ！」

何だか情緒不安定なオッサンを、とりあえず宥める。  
なだ

「そうだな、まずは頼みを言わないとな………実は

手違いであの四人のどれが本体オリジナルか分からなくな

ったのだ。それが、複製はほぼ完璧だから、もう

誰が複製クローンで誰が本体オリジナルなのか分からなくなってしまった」

「えー……目印付けとくとか、色々あったでしょう。ちよつと傷つけておけば、傷までコピーされないんじゃないんですか？」

「貴様ああああっ！瑚麻を傷つけろというのかああああっ！」

「二、三日で治るような傷でいいでしょうがっ！」

「時間の問題じゃないわああああっ！」

「分かった、分かりましたごめんなさい！」

まあ、瑚麻が四人いたら俺なんて幸せで死にそうだけだな。

「そこで君に頼みがある。君には本体オリジナルを特定して

欲しい。性格はほんの少しだが違うようだ。我々には分からなくても恋び……との、貴様になら分かるかもなあ！」

「いてっ！ですから、そこでいちいち切れないでくださいって！」

「失敬、私としたことが取り乱したようだ」

「いえ、とてもあなたらしいと思いましたが」

再び何事もなかったかのように穏やかにソファに座る。

この人、メンタルの病院に行ったら、何か病名も

らつてくるんじゃないか？

「とにかく、特定をしてくれるなら、君を認めてもいい。我々よりも瑚麻を理解している君に、瑚麻を……預けても……いい……っ！」

切れかけたが、ギリギリ持ち直した愛妻氏。

「分かりました。引き受けましょう」

俺としてもこんなとはいえず、瑚麻の親父さん公認になれば嬉しいし、後でガタガタ言ってきたもこの事を盾に出来るしな。

「いやあ、引き受けてくれてよかったよ。断られると思っていたからね」

「いえ、瑚麻に関することで、俺が断ることはないですよ」

「そうか、よかった。ああ、ひとつ言い忘れたが――」

にこやかに話す愛妻氏。

ふう、やっと、穏やかに話が進みそうだ。

「もしも一月以内に見つけられなかったら、君を女の子にするからね」

「……へ？」

今、なんて……？

すい

「我が研究所の細胞研究の粋を尽くして純度百パーセント、生まれたときから女だったような、遺伝子を根本的に書き替えた、生理もあれば妊娠もする、完全な女として、瑚麻の親友になつてもらおう！」

「いやいやいやいや！ それはまずいでしょ！」

「まずいも何も、私は貴様の存在を聞いた時からそのつもりなのだ。だが、一度だけ、見逃すチャンスを与えるというだけだ」

ヤバイ、このおっさんマジだ。

オラジナル

「嫌だったら、本体を見つけ出せ！ そうしなれば、本当に女にするからね！」

「は、はいいいいいいっ！」

ヤバイ、ことになつてる気がする。

「ではここに四人を呼ぼう」

愛妻氏が部屋の電話まで歩いて行つて行くけど、なんかこう、俺の理解がいつて行つてないんだけど。

いや、冷静に考えるとクローンってなんだよ？ 俺の彼女が四人に増えるの？

その四人の中から俺が本物を見つけ出す？

それで、それが出来ない、俺が女になる？

……いや、冷静に考えても話がついていけない。

「もしもし、瑚麻か？ 待て待て、切るな！ それは謝ったではないか！ 小遣い六倍の要求も呑んだらう。それは当然の権利？ まだ怒っている？ いや分かる！ 分かっているから聞いてくれ！ 私だつてこの状態を回復するために対策を考えているのだ」

さっきまでの口調とは違い、情けないくらい受話器の向こうの瑚麻の機嫌を窺っている。

「今、ここに澤田君に来てもらつている。彼は好青年で、快く私の頼みを聞いてくれたよ」

え？ 快く？ っていうか、好青年って。

俺、青年って初めて言われたし、まだ十六歳だぞ？ 少年だぞ？

「いい人じゃないか、彼はお前の事を言っても大丈夫だ。信頼できる。だから相談をした。彼なら解決してくれるだろう」

このおっさんは何を言ってるんだ。

「では。急いで来なさい。彼を待たせては悪いからね……おげえええっ！」

愛妻氏は、受話器を置いた瞬間、反吐を吐いた。<sup>へド</sup>

余程、言いたくないことを言つてたのか。

「だ、大丈夫ですか？」

「うぐっ、貴様に言つておくことがあるっ！ この部屋で見たことは全て瑚麻には言うな！ 言つたら、三日三晩苦しんでから死ぬような細胞を植えてやる！」

「それ、最早生物兵器ですよ？ 分かつてます

つて、言いませんから！」

て言うか俺も、この人に逆らったらヤバいことくらい分かつてる。

この人に逆らうことがあるとしたら、瑚麻が可哀想な時くらいかな。

「……俊陽……くん？」

応接室のドアを半開きしてこちらを窺っている瑚麻。

「瑚麻！」

やっとう瑚麻に会えた！

正直、さっきまでは本当に心細かった。

走って行きたいが、やたらニコニコしている愛

妻氏が笑顔で牽制している。

「わあ、本当に来てくれたんだあ……」

「俊陽くんだ！」

瑚麻の後ろからわらわらと瑚麻が現れる。

髪型がそれぞれストレート、ポニーテール、おさげ、ツインテールとバラバラだからそれぞれの認識は出来るが、同じ髪型だったら区別つけられるかどうか分からない。

「……………あ、うん……………こんにちわ」

話に聞いていたけど、こうして四人の瑚麻を見ると、やっぱり壮観だな。

うん、みんな可愛い。

「ごめんね？ こんなことに巻き込んだじゃって……」

「いや、いいんだよ。瑚麻の悩みはみんな俺が解決するから」

「俊陽くん……」

俺を尊敬の眼差しで見つめる瑚麻四人衆。

向こうで反吐へドを吐く愛妻氏。

何なの、あのおっさん？

「じゃ、とりあえず、うちに来て？」

瑚麻のうち、ストレートの瑚麻がそう言った。

「ははは、瑚麻、それはまだ早いんじゃないかな？」

「パパは黙ってて」

「はい」

「こつちだよ！」

ポニーテールの瑚麻が、俺を引っ張るように連れて行く。

「もう、ポニテったら、そんなに引っ張っちゃ駄目だよ」

おさげがそれを窘める。

「いいのっ！ だって、俊陽くんは、私の彼氏なんだもん！ えへー」

ぎゅつと、俺の腕に抱き着くポニーテール。

「ぐぎぎぎぎいいいいいいっ！」

引き離そうとする他の三人が動きを止めるほどの愛妻氏の歯ぎしり？ みたいな何か。

「パパ、うるさい」

「ぐおおおおおおつ！」

叫びとも、唸りとも取れる声の後。

俺は、初めて見た。

大の男の号泣というものを。

「あー、もう、うるさいなあ。早くいこ？」

「あ、ああ……」

俺はおそらく瑚麻と離れると殺されると思ったので、とりあえず瑚麻について行く。

普通の研究施設のような廊下の突当りのドアに「ここより先、愛妻家自宅」という看板が貼ってあった。

そのドアをツインテールが開き、先を歩く。

「じゃ、座って？」

さつきカメラで見たリビングに通された俺は、ソファを促された。

えーっと、四人でここ座ってたよな？

俺、どこに座れば……。

「ここ」

ツインテールの瑚麻が不愛想に指差す。

「ここに座れば？」

それはツインテールの隣の場所だった。

「あ、ずるい！ じゃあ、私はその隣！」

ストレートはツインテールの反対側に座る。

「あ、あのー……」

いや、ツインテールとストレートの間の幅は、電

車で空いても座るのを躊躇ちゆうちよするくらい狭くて、

多分座ったらみっちみちなんだけど。

「あのさ、もつと二人とも横に——」

「早く座っちゃえーっ！」

ポニーテールに抱きつかれつつ、押されて、俺はその狭い場所に座る。

両脇の瑚麻とは肩が触れるってレベルじゃなく、お互いの腕を押し付ける状態になってるし！

「じゃ、私はここーっ！」

そして、あろうことか、ポニーテールは、俺の膝にぼーん、と座ってきた。

左右正面から瑚麻を感じる！

何だここは、天国か？

この後三日三晩、愛妻氏の地獄の拷問を受けて死んでも割が合うくらいの天国だ！

こんなに積極的な瑚麻が三人も！

この子と付き合ってた良かった！

……ん？ 三人？

俺は目の前のシャンプリーの匂いがするテールを

避けて、もう一人を探す。

すると、ソファに座らず、立ったままのおさげの

瑚麻が、羨ましそうにこちらを見ていた。





「とりあえずみんな、落ち着こうか」

俺はなるべく冷静を保ちながら、みんなにそう言った。

「ちゃんと話をしよう。な？」

「うん、そだねー」

ポニーテールがぴよん、と立ちあがる。

ツインテールとストレートが少しだけ横にずれ、隣におさげが座り、別のソファにポニーテールが座る。

「じゃ、お話しよっかー」

ポニーテールが無邪気っぽく微笑む。

うーん、さつきから思ったけど、ここにいる四人、全員確かに瑚麻なんだけど、俺の知ってる瑚麻とちよつと違うというか、なんか少しDNAが違うと言われると、全員違う気がする。

「な、なんかさ、みんなちよつとずつ性格が違わない？ そんなに違うって聞いてないんだけど……」

クローン

愛妻氏は「ほぼ完全な複製」と言っていた。

だが、ポニーテールの瑚麻はなんだか俺の知る瑚麻より無邪気だし、ツインテールはさつきからずつとむすつとしてるし、おさげの瑚麻は、気さく

な瑚麻とは思えないくらいはに canders し、ストレートはずいぶんと積極的だし。

なんかみんな確かに、瑚麻なんだけど、なんだかちよつと違う。

「違うって……ねえ？」

少し困ったようにストレートが困ったように他の瑚麻を見る。

「言ったじゃないの。私はもつと自分を俊陽くんの前で見せるって。もう忘れたの？ 全く……あ、あんな告白したのに忘れるって……」

ツインテールがむすつとしたまま、後半は顔を赤らめながら答える。

ああ、そう言えばそんなこと言ってたっけ。

告白成功で嬉しすぎて忘れてた。

「てことはみんな、本当の自分を出してるって事？」

「そう言ったじゃん！ 大好き！」

ポニーテールが俺に抱きついてくる。

この子は瑚麻にしては子供っぽいな！

でも瑚麻は十六歳のお身体をされているんですよ？

男に抱きついちゃまずいよね！

何故なら男はそれで興奮するから！

お兄ちゃん興奮してるから！

「もう、ポニテは本当に子供ねえ」

ストレートが呆れたように言う。

「だって、彼氏だよ？ 付き合ってるんだよ？

どんな私見ても嫌いなならないって言ってくれた

んだよ？ 甘えなきや損じゃない！ 大好き！」

そういう考えの女の子は大好きだ。

だけど、他の瑚麻もいるからさ。

「落ち着いて、瑚麻。そういうの嫌いじゃないけど、

今は離そうな？」

「分かった〜」

ポニテールは素直に戻る。

「なんか、みんな思いつきり性格違うような気がする

んだだけ。愛妻氏はほとんど同じって言って

ただだけ、違うのかな？」

「んー、一緒だよ？」

ストレートが言う。

ストレートが一番本オリジナル体に近いのかな。

「え？ いや、全然違うけど？」

「そうだねー、私も驚いてる。でもね、地を出して

もいって言ったのは俊陽くんだよ？ だからみんな、人前では出さない私を出してるっただけ」

「えーっと……」

「ああっ、もうっ！ どうして分からないのよ

っ！ だから、ポニテもストレもおさげもみんな

私と同じ！ 考えてることも思ってることも！

ただ、みんな表に出してない違う部分を出したっ

ただけ！」

ツインテールが怒ったように説明してくれる。

「つまり、あれかな、みんなほとんど同じで、それ

ぞれの性格も根本は同じで、違いは俺の前でどんな自分を出すかってだけってこと？」

「そう！ つまりそういうこと！ 大好き！

にやほー！」

ポニテールはまた抱き着いてくる。

えーっと、瑚麻ってこんな面もあるんだな。

完全に子供に戻って甘えてくる。

もちろんそんな瑚麻も可愛い。

「……何にやけてんのよ？」

ツインテールに突っ込まれる。

「嬉しいからかな、瑚麻に抱き着かれて」

俺は素直に答える。

「な、何言ってるんよ、馬鹿じゃない？ そんなの、わ、私だって……」

「ねえ、俊陽くん、こういうのも嬉しい？」

ツインテールの言葉を遮って、ストレートが俺の腕に抱き着いてくる。

「嬉しいです！」

胸が当たってるんですけど、多分言ったら「当ててんのよ」って言われそうだから言わなかった。

こんな瑚麻も可愛いなあ。

「じゃ、じゃあ、私は、私は……だめえええっ！」

ツインテールは真っ赤になりながら俺の肩を叩く。

恥ずかしがってるこの瑚麻もまたいい。

「……………」

その様子をじーっと見つめるおさげの瑚麻。

羨ましそうではあるんだが、そういえばさつき

から一言も喋ってないな、あの瑚麻<sup>子</sup>。

「どうしたの？ 遠慮しなくてもみんな瑚麻なんだからさ」

「え？ うん……でも……」

俺が声をかけると少し驚いて、顔を真っ赤にし

てうつむいて、その後、構ってもらえて嬉しいのかにやけてる。

何あの可愛い生き物？

あれ、俺の彼女なんだぜ？

「それで、さつきからお互いに呼び合ってる名前は何？ ポニテとかストレとか。まあ、髪型なのは分かるけど」

「これはね、お互い全く同じだし、自分でも誰が誰か分からないから、髪型で分けることにしたんだよ。で、それで呼ぶことにしたの」

ストレート、通称ストレが答えてくれた。

「へえ、じゃあ、俺もそれで呼んでいいかな」

「駄目に決まってるじゃないの！」

ツインテール、通称ツイテが拒否する。

「え？ どうして？」

「だって、私は瑚麻だもん！ 俊陽くんは瑚麻って呼んでくれなきゃだ！ 大好き！」

ポニテール、通称ポニテが俺を強く抱きしめる。

この子は語尾に大好きって言わないと駄目なのかな？

「うん、言いたいことは分かる。俺だって瑚麻のこ

とは瑚麻って呼びたいけどさ、瑚麻って呼んだらこの四人が当てはまるだろ？」

「むーん……」

ポニテは頬を膨らませて俺を睨む。

「じゃあさ、二人でいる時は瑚麻って呼ぶけど、他の誰かがいる時はその名前で呼ぶっていうのはどうかな？」

「じゃあそれで！ 大好き！」

抱きしめてくるポニテを、俺は撫でてやった。

だって可愛いから。

するとツイテに睨まれるわ、ストレに困った顔で微笑まれるわ、おさげに悲しそうな顔されるわで困る。

さて、まず親父さんに本物を探すと言ったが、正直困ったな、これ。

確かにそれぞれ違いはありそうだな。

だが、その違いは、これまで俺に見せたことのない部分ばかりで、俺としては新鮮で嬉しいが参考にならない。

「うーん……みんなに同じ記憶があるんだよね？」

「そだねー。パパが入れて言った所に入るまでは、みんな同じだねー」

ポニテが俺の胸で甘えながら言うが、これ、付き合ってから数日のカップルの甘え方じゃないよね。

「そうか、長くなりそうだな。そう言えば、学校はどうするの？ 休むわけにも全員で行くわけにもいかないだろ？」

「それは話し合った結果、順番に行くことにしたの」

「本当は身代わりがいるならサボるのもいいって思ってたんだけど」

「学校に行かないと俊陽くんに会えないからね！ 大好き！」

抱きついてくるポニテを撫でてやりながら、ど

うやって本体オリジナルを探すか考える。

「ちよつと、ポニテ、くつつき過ぎよ、離れなさいよ」

べたべたにくっついていて上、俺に撫でられているポニテに、ツイテが見かねて言う。

「やだ」

だが、ポニテはぎゅつと俺に抱き着く。

「迷惑でしょうが！ 離れなさい！」

「やーだー！」

ツイテが後ろからポニテを引っ張るが、ポニテは俺に抱き着いて離れない。

力は全く同じ、当たり前か。

「ちよっと、ストレ、手伝ってよ！」

「えー、でもー……」

戸惑ったようなストレ。

「はーなーれーろーっ！」

「やだっ！ えいっ！」

暴れるポニテの足が、ツイテの顔面を蹴ったその時。

『痛っ!!』

四人ともが同時に顔を痛がった。

え？ 何？

「ちよっと、二人とも、やめよ？ 蹴ったってみんな痛いんだから。ポニテももう離れて？」

「んー、分かった……」

誰も蹴っていない鼻をさすりながら、ポニテが俺から離れる。

あー、これはあれか。

双子が片方痛い目に遭ったなら、もう片方も痛がるってやつか。

「大丈夫か、四人とも？」

俺は誰を気づかかっていいか分からず、とりあえず全員を気づかってみた。

「うん、大丈夫。私は痛かったただだから」

ストレがそれでも痛々しげに苦笑しながら答える。

ああ、そうか、三人は痛みを感じただけだ。

「ツイテは大丈夫か？」

俺は実際にポニテに蹴られたツイテの顔を見る。確か鼻の上、目と目の間くらいを蹴られたと思

うし、そこは確かに少し赤くなっているが、別には残りそうにないな。

……しかし、瑚麻の肌つて、綺麗だなあ。

白いし、きめが細かいし、それにまず、顔の造形が――。

「な、何じつと見てんのよっ！」

「くはっ！」

俺は真っ赤な顔のツイテに思いつき突き飛ばされる。

ちなみに俺以外痛がらない、当たり前か。

瑚麻の力はそこまで強くないから、俺は少しエビ反りになっただけだ。

「何するのよ、ツイテはっ！」

「うるさいっ！ みんな俊陽くんが悪いのっ！」  
顔を両手で隠しながらそう怒鳴るツイテ。

うーん、こんな恥ずかしがりやだったかな、瑚麻  
って。

まあ、こういう瑚麻も可愛いと言えなくもない。

「まあいいって、これくらい気にしてないし」

「俊陽くんは優しいっ！ 大好きっ！」

関係のないポニテに、やっぱり抱きつかれる。

まあ、徐々に慣れてきたけどさ、一昨日までただの女友達で、身近にいたけど、ちよつと手が触れただけでドキドキしてたような子が、ここまでべたべた触れてくるとさ、なんか嬉しい反面寂しくもあるよな。

手に入れたものが実は安っぽかったって感じで。

「じゃあさ、状況は分かったからさ、対策を考えてみるよ。今日はとりあえず、考え事したいからこれで帰るよ」

「えー、せつかく来たんだからさあ、もっというようよー、二、三日泊まっていいこうよー」

「いや、その間に俺、瑚麻の彼氏じゃなく彼女になつてしまうからさ」

よく考えたら、今ここであったこと、監視カメラ

での愛妻氏が見てたんだよな、多分。

……それってヤバくないか？

いや、まあ、俺からは何もしてないから大丈夫。

うん、俺からは何もしてないよな？

いや、したっ！ 撫でた！

ヤバいな、この部屋出たら、ダッシュで帰ろう。

この近くの駅は確か知ってるし。

「やーだー！」

俺にしがみつくポニテ。

「いや、もう帰るからさ、じゃあまた明日学校で」

「あ、送って行くよ」

「いって……いや、お願いしたいな」

瑚麻と一緒にいる限り、愛妻氏は襲っては来ないだろう。

「でも、四人で行くわけには行かないし……」

四人はお互いをじっと見つめる。

『じゃんけんぽんっ！』

そして、声を揃えてじゃんけんを始める。

『あいこでしょっ！ しょっ！ しょっ！ しょっ！ しょっ！』

なかなか決まらない。

まあ、そりゃ、昨日まで同じだったんだからなあ。

瑚麻たちのあいこは一分くらい続いた。

「しよっ！ ああ、負けた！」

「……負けたわ」

「負けちゃったー！」

勝つたのは、さつきから一言も話してないおさ

げだった。

「あ、あの……」

「うん、じゃあ行こうか？」

「あ、うん……」

俺はおさげを連れて部屋を出る。

「じゃ、またな、他の瑚麻？」

「はい」

「またねー」

「……ふん」

三人の挨拶を背に、俺は部屋を出る。

「あの……ごめんね」

部屋を出た、おさげがいきなり謝ってきた。

「？ 何の話だよ？」

「色々……パパが巻き込んだこともそうだし、今

日も他の子が迷惑かけてたよね……？」

おさげは、本当にも仕分けなさそうに謝る。

「いや、あいづ……親父さんはともかく、瑚麻が困

っているなら協力するのは逆に嬉しいことだし、瑚麻と話が出来るのは俺にとっては嬉しいことだからさ」

「……うん」

おさげは気の毒に思えるくらい真っ赤になって、

絞り出すような声でやつとそう答える。

瑚麻にもこんな面があるんだな。

これはこれで可愛い。

まあ、こんな瑚麻なら多分俺とここまで仲良く

なれなかったと思うけどな。

「やあ、もう帰るのかい？」

愛妻氏が狙いすましたように現れる。

それこそどこかで見えていたかのようなタイミングだ。

「はい、今日はもう帰るか」と

「私が駅まで送って行くから、パパは何もしなくてもいいから」

「しかし、瑚麻、私が自宅まで送った方がいいと思

うんだよ」

「いいから、パパは何もしないで！」

さつきまでおどおどしていたとは思えない口調

で冷たく言い放つおさげ瑚麻。

ああ、そういえば俺にだけ本当の瑚麻を見せる  
って言ってたから、他の人間相手にはこれまで通  
りなんだろうな。

「……分かった。そこまで言うなら仕方がない。送  
って行きなさい」

愛妻氏は寂しそうに去って行く。

俺を見た瞬間だけ尋常なく憎悪に満ちた表情で  
睨んだがな。

「じゃ、行こうか」

「あ、うん……」

俺は玄関から、つまり研究所の裏から出て、おさ  
げと一緒に駅に向かう。

無言。

いつも気さくに話しかけてきて、俺もそれに答  
えてって感じで会話が盛り上がるけど、よく考え  
たら俺から話しかけたことって、そんなになかっ  
たよな。

「そういえば、瑚麻ってこんなにおとなしい子だ  
っけ？ もっと気さくな子だと思ってたんだけど」  
無言ってのもどうかと思ったので、俺から話し  
かけてみた。

「……嫌いに、なった……？」

「いや、そうじゃなくってさ！ 単なる感想って  
いうか、本当の瑚麻を見て嬉しいっていうか  
さ！」

俺は慌ててフオローする。

「うん……ありがとう」

おさげは少し嬉しそうに微笑んだ。

「あのね？ 実は私って、本当はとっても内気な  
の。みんなの前では頑張ってるけど、本当は舞  
ってると、本当は嫌われないか、馴れ馴れし過ぎないか  
って、どきどきしてるの。……こんなこと、俊陽く  
ん以外には言わないから……俊陽くんも言わない  
でね……？」

「ああ、もちろん言わない。それと、本当はそんな  
子なのに、俺に話しかけてくれて、俺と仲良くして  
くれて、ありがとうな？」

「え……？」

俺が瑚麻と仲良くなって行った過程での、瑚麻  
の距離の取り方は絶妙で、決して馴れ馴れしいと  
は思わず、だが、常に俺が取る距離よりも一歩だけ  
近い位置にいるから、少しずつ気兼ねなく仲良く  
なっていた。

それは瑚麻がこれまでの友達付き合いで培った



天然の距離の取り方だと思っていた。

だあ、それは違った。

目の前にいる瑚麻は、距離感をずつと測りながら、不安に思いながら、人に近づいていると言った。

この子がコピーか本体かは分からないが、たと

オリジナル

えコピーだとしても、ほとんど変わらない複製のはずなので、瑚麻はずつとそう思ってきたんだろう。

誰にも相談できず、ただ、一人で嫌われる恐怖と戦いながら、人と仲良くしてきたんだろう。

それは確かに俺だつてよく考えればそうかも知れないし、みんなそうかも知れない。

だけど、この子が、俺の彼女の瑚麻が、そう考えて来たと思うと、とても愛しい。

俺は瑚麻が話しかけてくれなかったら、多分仲良くはなっていないし、俺もそんなに人懐っこい方じゃないからな。

瑚麻という友達、そして、彼女を得られたのは言うまでもなく、瑚麻のおかげだ。

「本当に、ありがとう。あの日、俺に話しかけてく

れて。その後も、仲良くしてくれて」

「あ……」

俺は、愛しいと思った自分の彼女を、自然に肩を引き寄せた。

おさげは、いや、瑚麻は自然にそれに従ってくれ、俺と瑚麻の肩は触れ合った。

たったそれだけのこと。

ずつと付き合っているカップルなら、何でもないことだろうけど、付き合いたての俺たちには、それだけで嬉しかった。

「……うん」

もちろん派手なコミュニケーションをするあの三人も魅力的だが、こんな瑚麻も、悪くないと思う。





SFチック学園ラブコメディ

# 4人の彼女が俺を寝かせてくれない

B6 140ページ 600円

2016年12月30日 コミックマーケット91  
西館 の11b「他人の代表」